

ベビーゲート等の使用に関する事故事例等

- 東京都が把握した事故事例として、過去 5 年間¹で、ベビーゲート等が関連する事故と考えられる 5 歳以下の事故事例は 123 件で、そのうち重症は無く、中等症が 7 件であった。
- 負傷した子供の年齢は 6 か月以上から 2 歳までが多く、特に 1 歳が多かった。また、男児の事故件数が女児の事故件数の 2 倍以上であった。
- ベビーゲート等の事故 123 件のうち、半数近い 58 件が「閉め忘れ」による事故であった。階段上の設置 が 83 件と、事故の多くを占めていた。
- ベビーゲート等がなく、設置により防げた可能性のある事故が多数あった。東京消防庁のデータでは、過去 5 年間に 0～1 歳の住宅内での階段転落事故は 795 件あり、うち中等症以上が 109 件と、症状の重い事故の割合が多かった。
- 2015 年度に東京都が実施したヒヤリ・ハット調査「乳幼児を育てるために使う製品による危険」のアンケートでは、0 歳から 6 歳までの子供を持つ 20 歳以上の男女 3000 人のうち、「ベビーゲートによる危害の経験がある」という回答が 13 件(0.4%)「ヒヤリ・ハットの経験がある」という回答が 53 件(1.8%)だった。

<用語の定義>

- ・「危害」経験とは、通院、入院の有無にかかわらず、けがをした経験
- ・「ヒヤリ・ハット」とは、けがをしそうになった経験
- ・「中等症」とは、傷害の重さを示す言葉。軽症と重症の間に位置付けられるとされている。傷病者重症度分類表²によれば、「生命の危険はないが、入院を要するもの」と定義されている。
- ・「閉め忘れ」とは、ベビーゲートを開放したままとなっている状態のこと

本資料の事故事例において「ベビーゲート等に関連」と分類したのは以下のとおり

- ・ 事故事例の中に「ベビーゲート」等の記載がある。
- ・ 以下の例のようなベビーゲート等の設置が推測される記述がある。
 - (例)「階段に取り付けた柵が閉まっておらず」
- ・ 以下のような屋外で発生したものは除く。
 - (例)「アパートの階段の柵に頭をぶつけた」

¹ 東京消防庁搬送事例は 2014 年 1 月～2018 年 12 月まで、医療機関ネットワーク受診事例は 2014 年 4 月～2019 年 3 月までが対象となっている。

² 「救急搬送における重症度・緊急度判定基準作成委員会」報告書（平成 16 年 3 月 財団法人 救急振興財団）より引用

1 東京都が把握したベビーゲート等に関する事故

東京都（以下「都」とする。）は事故事例の分析のため、東京消防庁救急搬送事例、医療機関ネットワーク³受診事例を収集⁴した。

都が把握した事故事例として、過去5年間で、ベビーゲート等が関連する5歳以下の事故で救急搬送や受診に至った事例は123件あった（表1）。その内、中等症は7件あり、重症はなかった（図1）。

なお、ベビーゲート等が設置されている家庭でも、ベビーゲートのロックを閉め忘れたなどの理由で乳幼児が通過した後に危害が生じた場合は、ベビーゲート等の記載がなく事故事例として抽出できていない可能性がある。

表1 過去5年間の事故把握事例件数

事例種別	受診・救急搬送件数
東京消防庁搬送事例	44 (2)
医療機関ネットワーク受診事例	79 (5)
合計	123 (7)

(注) カッコ内は中等症の件数

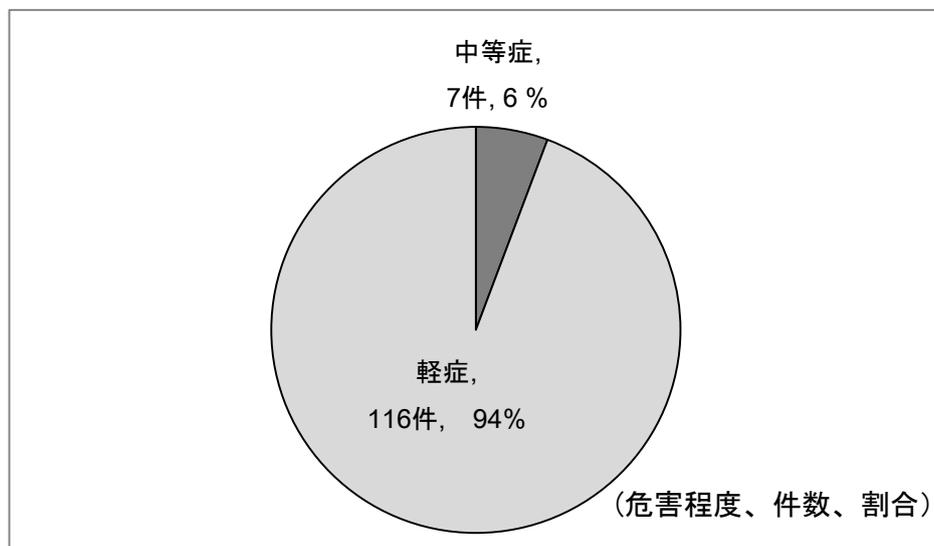


図1 把握事例の危害程度の割合

³ 2010年から消費者庁と独立行政法人国民生活センターとの共同事業として、全国24病院（2019年7月時点）が参画し、消費生活において生命・身体に被害を生ずる事故に遭い医療機関を受診した患者から、消費者からの相談になりにくい不注意や誤った使い方も含めて事故の詳細情報等を収集し、同種・類似の事故の再発を防止するため、実施している。

⁴ 収集した事例のうち、ベビーサークルや据え置き式のベビーゲートやフェンス、ペットゲートと思われる事故事例は除外した。

(1) 事故発生状況に関する各種集計結果

ア 年齢・性別ごとの発生件数

ベビーゲート等に関連する事故で負傷し、救急搬送や受診に至った子供の年齢は、6か月～2歳が多く、最も多いのは1歳であった。また、救急搬送事例、受診事例ともに男児が女児の2倍以上の件数となっている（表2-1、表2-2、図2、図3）。

表2-1 年齢・性別ごとの発生件数（東京消防庁救急搬送事例）

	～5か月	6か月～	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	計
男児	0 (0)	4 (1)	12 (0)	8 (0)	3 (0)	1 (0)	2 (0)	30 (1)
女児	0 (0)	1 (0)	5 (1)	5 (0)	3 (0)	0 (0)	0 (0)	14 (1)
総数	0 (0)	5 (1)	17 (1)	13 (0)	6 (0)	1 (0)	2 (0)	44 (2)

(注) カッコ内は中等症の件数

表2-2 年齢・性別ごとの発生件数（医療機関ネットワーク受診事例）

	～5か月	6か月～	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	計
男児	0 (0)	10 (1)	27 (2)	16 (0)	3 (0)	0 (0)	1 (0)	57 (3)
女児	0 (0)	8 (1)	10 (1)	2 (0)	2 (0)	0 (0)	0 (0)	22 (2)
総数	0 (0)	18 (2)	37 (3)	18 (0)	5 (0)	0 (0)	1 (0)	79 (5)

(注) カッコ内は中等症の件数

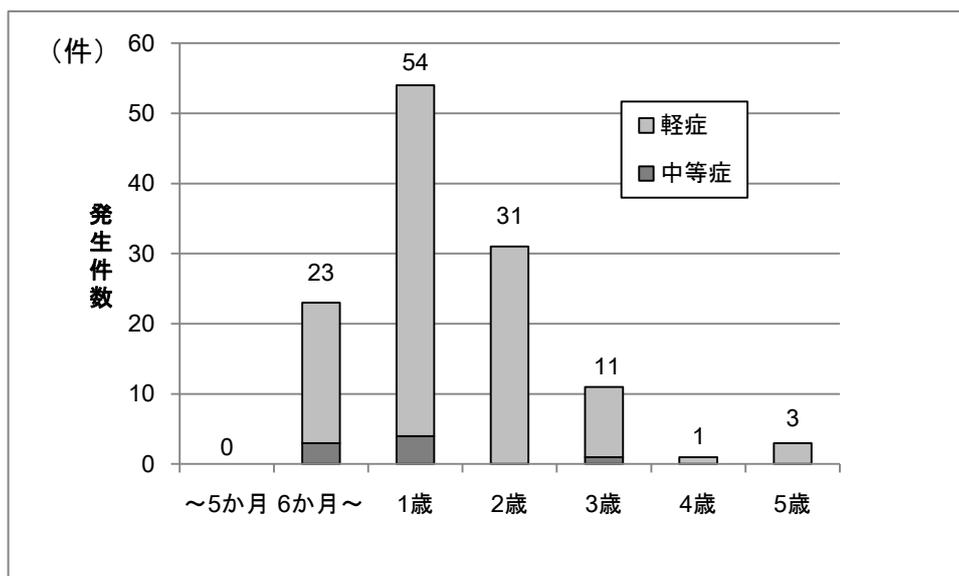


図2 年齢別発生件数（東京消防庁と医療機関ネットワーク事故事例の合計）

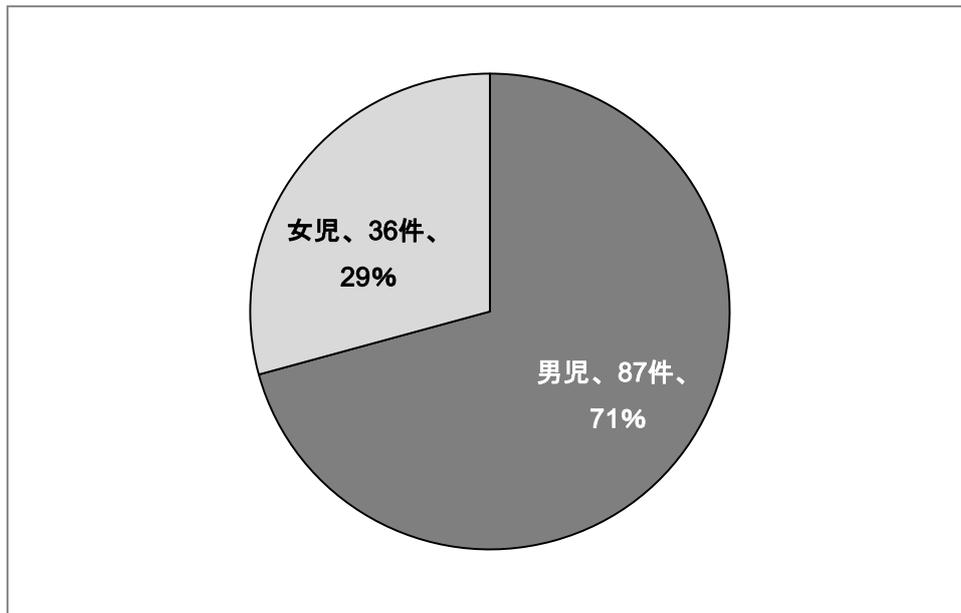


図3 負傷した乳幼児の性別

イ 事故発生推移

東京消防庁の救急搬送事例の年別の件数は、2017年までは増加傾向にあったが、2018年は減少している（表3）。なお、医療機関ネットワークの参画医療機関数は時期によって変わっているため、発生件数の推移は参照しない。

表3 事故発生件数（東京消防庁）

	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	計
救急搬送事例	5 (0)	8 (0)	10 (0)	14 (2)	7 (0)	44 (2)

（注）カッコ内は中等症の件数

ウ 事故発生原因

「危険な場所に子供を立ち入らせない」というベビーゲート等の製品的特性から、「ベビーゲート等が直接関連した事故」と、ベビーゲート等を通過した先の危険箇所では負傷した「ベビーゲート等を通過した先で発生した事故」の2つに事故事例を分類した(表4)。

ベビーゲート等が直接関連した事故は44件あり、ベビーゲート等を通過した先で発生した事故は79件であった。

表4 事故発生原因

事故の形態	ベビーゲート等に 関連する原因	東京消防庁	医療機関 ネットワーク	合計
ベビーゲート等 が直接関連した 事故	ベビーゲート等が外れた※	9(1)	5(0)	14(1)
	ベビーゲート等にぶつけた	6(0)	10(0)	16(0)
	ベビーゲート等に挟んだ	8(0)	3(0)	11(0)
	ベビーゲート等につまずいた	1(0)	0(0)	1(0)
	不明・その他	1(0)	1(0)	2(0)
ベビーゲート等 を通過した先で 発生した事故	閉め忘れ	8(0)	50(5)	58(5)
	ロック解除	1(0)	8(0)	9(0)
	ベビーゲート等を乗り越えた※	10(1)	2(0)	12(1)
総計		44(2)	79(5)	123(7)

(注) カッコ内は中等症の件数

※「ベビーゲート等を乗り越えた」と「ベビーゲート等が外れた」は、通過した先での事故か、直接関連した事故かの分類が難しいため、ここでは、本表のように分類している。また、「不明」は原因が不明な事例や「柵にかまって遊んでいて、手を滑らせて転倒した」というような用途外使用の事例を含む。

- ◆ 東京消防庁の事例で最も多いのは、「ベビーゲート等を乗り越えた」事例である。
- ◆ 医療機関ネットワークの事例で、最も多いのは「閉め忘れ」の事例である。
- ◆ 参考までに、東京消防庁の事例と医療機関ネットワークの事例を比較すると、前者は通報対応の記録であるのに対し、後者は受診先の病院で受診者に細かく聞き取りを行った記録である。

◆東京消防庁の事例の中で最も多い事故は「ベビーゲート等を乗り越えた」であった。
以下に事故事例を示す。

- 親が目を離していた際に居室内にある柵（高さ約 50cm）を乗り越え転倒。（1 歳、軽症）
- ベランダ進入防止用の柵を乗り越えたあと、サッシのレールに頭から落ち頭部を受傷。
（1 歳、軽症）
- 自宅にあるベビーゲートを乗り越えて転落受傷。（1 歳、軽症）
- 自宅階段の柵をよじ登り、転落、前額部を受傷。（1 歳、軽症）
- 親が 1 階でゴミ出しをしていたところ、物音がして振り返ると、2 階にいたはずの傷病者が柵を乗り越え、階段を転落し、受傷。（0 歳 9 か月、中等症）

◆医療機関ネットワーク受診事例の中で、最も多い事故は「閉め忘れ」であった。以下に事件事例を示す。

■自宅の階段の2階から1階まで（14段）転落した。2階に設置したベビーゲートの鍵をかけ忘れていた。遊んでいて転落した。嘔吐なし、意識消失なし、保護者が目撃。右頬部打撲傷、左後頭部打撲傷、右頸部皮下出血と皮下血腫を認め、経過観察目的に2日間入院。（1歳11か月、男児、中等症）

■自宅の階段13段目から転落した。誰も見ていなかった。保護者は、落ちた音に気づき階段下にいる児を発見し救急要請。下顎の擦過傷と左頸・左頭頂部から後頭部にかけて発赤あり。出血・腫脹なし。2階の階段には勝手に行き来できないように柵をしているが、柵のロックが外れており、おそらく児が保護者がいないことに気づき柵にもたれかかったところそのまま1階に落下したものだと思われる。（1歳1か月、女児、中等症）

■保護者は1階で歯みがきをしていた。2階のリビングに児と別の保護者がいた。2階の階段に、ロール式のベビーゲートが設置してあるが、ロックが掛かっていなかったようで児が2階から13段転落してしまった。保護者が目撃し、1階で児をキャッチした。階段は木製、手すりはある。ロール式ベビーゲートに手動のロック機能は付いているが操作がしづらくロックをしていなかった。後頭部挫創1cmで縫合処置を要し通院治療。（1歳4か月、男児、中等症）

■自宅の階段から転落した。他の病院を受診したが小児にしては高エネルギー外傷のため全身精査目的にて当院受診となる。CT上明らかな外傷は右大腿骨骨折幹端部若木骨折のみ。現時点での外傷は右大腿骨骨折だけであるが、時間とともに、他の損傷が明らかになる可能性もある。2階の柵は自動では閉まらなくなったが、手動では閉まる。鍵もあるので鍵をかけるようにする。2階が自分たちの生活の場、2階の部屋を出たらすぐに階段である。（7か月、男児、中等症）

■自宅にて、児は2階から1階に転落。木製階段13段。大人が目撃なし。保護者は1階で洗濯していた。事故の前、児は2階の階段近くの寝室にいて別の保護者が一緒にいたが眠っており、児が落ちた時も気付いていなかった。事故時、寝室の引き戸も階段のベビーゲートも開いていた。すぐに泣いて、意識消失なし。保護者は落ちる音で気づき、見に行った時には1階でうつぶせで泣いていた。床は木のフローリング。階段にベビーゲートを設置していたが兄弟のために開放したままにしていた。児は現在ずり這い可能で、兄弟の活発な動きに積極的についていこうとすることが多い。左大腿骨遠位端骨折のため入院加療。（6か月、女児、中等症）

- ◆製品が直接関連した事例として件数が多かったのが「ベビーゲート等が外れた」「ベビーゲート等に挟んだ」という事例であった。以下に事件事例を示す。

〈東京消防庁〉

- 自宅2階の階段上の廊下において柵に寄りかかったところ、柵が外れ1階まで転落し受傷。
(0歳11か月、軽症)
- 上階にある階段の柵が外れ、誤って13段目から転落。(1歳、軽症)
- 親が家事をしていた際に子供に呼ばれる声をしたため振り返ると、右大腿部(膝上)が鉄製の柵(ベビーゲート・幅約8cm程度)に挟まり取れない。(1歳、軽症)
- 自宅屋内階段1段目に設置してある、転落防止柵につかまり立ちしていたところ、柵が外れ後方に転倒し後頭部を受傷。(1歳、軽症)
- 自宅内の階段上に設置されていた柵にもたれかかっていたところ、柵が外れ階段4段の高さから転落し頭部を受傷。抱き上げたのち2回嘔吐した。(1歳、中等症)
- 自宅玄関前廊下のチャイルドゲートがはずれた際にゲートと共に後方に転倒し、頭部を受傷。
(1歳、軽症)
- 傷病者は自宅2階の居室と階段の間に設置していた柵に乗り遊んでいたところ、柵が外れ階段を転落、音を聞き駆け付けた両親が発見したところ6、7段転落しており、口腔内から出血。
(1歳、軽症)
- 自宅2階屋内階段降り口部分の柵がはずれ、階段を7～8段転落、受傷。(1歳、軽症)

〈医療機関ネットワーク〉

- 児は自宅2階にいた。2階の階段に設置したベビーゲートを本人が倒した音で2階にいた保護者が気づいて見に行った。5段目で一度頭をぶつけ、7段目で止まった。意識消失なし、嘔吐なし。右眼瞼挫創のため縫合処置を要し通院治療。(1歳10か月、女児、軽症)

- キッチンとリビングのベビーゲートにつかまり立ちをしていた時に、ゲートが倒れた。倒れたゲートが児の上に乗った状態になり、さらに保護者がそれにつまずいて、児の上に乗かってしまい全体重がかかった。すぐに啼泣し、意識消失なし、不機嫌なし。胸部打撲傷。(8か月、男児、軽症)

- 階段10段から転落。普段は2階の階段にベビーゲートがしてあるが外れていた。転落時に大人を目撃はなく、音で気づいた。駆けつけたときには、泣いていた。すぐに抱き上げたら普段通りの表情だった。嘔吐なし、意識消失なし。側頭部に発赤あり。頭部打撲傷のため外来通院。(1歳2か月、男児、軽症)

エ ベビーゲート等の設置場所

事故に関連するベビーゲート等の設置場所を事故原因別に示す(表5)。階段上に設置した場合の事故が他と比較して多く、123件中83件と全体の67%を占めている(図4)。また、さらに階段上に設置した場合の事故を原因別に分けると、閉め忘れが66%と大半を占めている(図5)。

表5 事故原因とベビーゲート等の設置場所

	階段			台所	居間	居室	ベランダ	玄関前	不明	総計
	上	下	不明							
外れた	10	1	0	0	1	0	0	1	1	14
ぶつけた	5	2	1	2	2	2	0	0	2	16
挟んだ	0	0	0	5	0	0	0	0	6	11
つまずいた	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
不明・その他	0	0	0	1	0	0	0	0	1	2
閉め忘れ	55	3	0	0	0	0	0	0	0	58
ロック解除	9	0	0	0	0	0	0	0	0	9
乗り越えた	4	0	1	1	0	0	1	1	4	12
合計	83	6	2	9	3	2	2	2	14	123

(注) 数値は東京消防庁と医療機関ネットワークの合算の件数

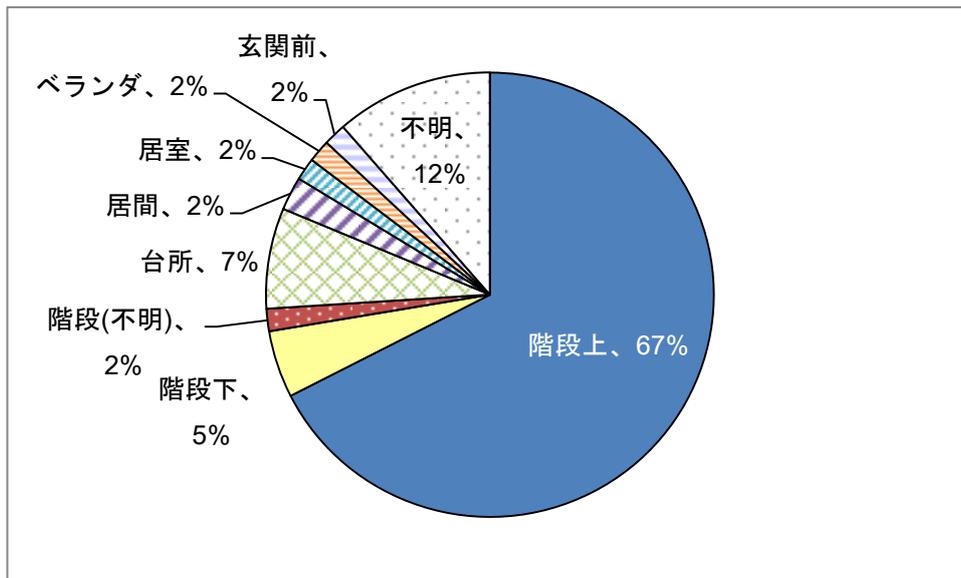


図4 事故に関連するベビーゲート等の設置場所

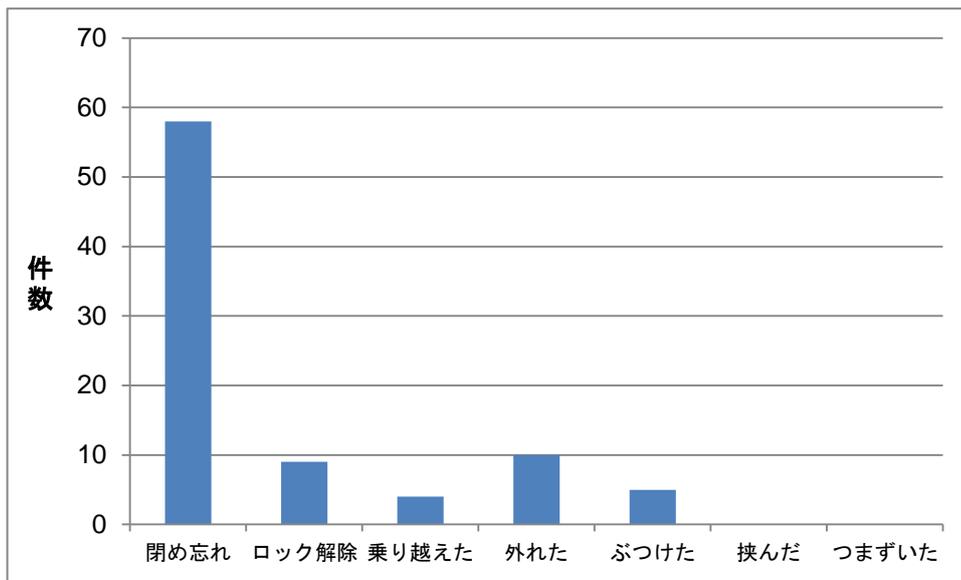


図5 階段上に設置されたベビーゲート等の事故における事故原因

オ 年齢と事故発生原因との関係

年齢と事故発生原因との関係について、表6に示す。「ベビーゲート等を通過した先で発生した事故」は1歳が多いのに対して、「ベビーゲート等が直接関連した事故」は、2歳が多い結果となった。

表6 年齢と事故発生原因との関係

		6か月～	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	総計
ベビーゲートが 直接関連した 事故	外れた	2	9	1	1	1	0	14
	ぶつけた	2	3	7	3	0	1	16
	挟んだ	0	2	7	2	0	0	11
	つまずいた	1	0	0	0	0	0	1
	不明・その他	0	0	1	0	0	1	2
ベビーゲートを 通過した先で 発生した事故	閉め忘れ	15	29	11	2	0	0	58
	ロック解除	0	6	2	1	0	0	9
	乗り越えた	2	5	2	2	0	1	12
合計		23	54	31	11	1	3	123

2 ベビーゲート等が設置されていない状況で起きた事故

都がベビーゲート等の事故事例を収集する中で、ベビーゲート等が設置されていない状況で起きた事故の中にも、ベビーゲート等を設置していれば、防げた可能性のある事故事例が多数あることが見受けられた。屋内で発生した事故、例えば階段からの転落や台所でのやけど、誤飲などである。

特に0～1歳における住宅内の階段転落事故は、東京消防庁のデータで795件、うち中等症以上が109件と14%を占め、ベビーゲート等に関する事故事例に対し、件数や症状の重い事故の割合が多かった（表7）。また、事故事例のうち、中等症以上の事例を抜粋した。

表7 0～1歳における住宅内の階段転落事故の発生件数（東京消防庁）

	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	計
救急搬送事例	181 (29)	162 (19)	154 (18)	152 (26)	146 (17)	795 (109)

（注）カッコ内は中等症以上の件数

(1) 階段転落の事例

〈東京消防庁〉

- 自宅で階段10段ほどの高さから転落、歯を損傷。（1歳、中等症）

- 自宅2階に居住する親は、屋内階段の方から大きな音と、子供の泣き声が聞こえたため見に行ったところ、1階の階段下に子供がおり号泣しているのを発見した。抱きかかえて2階に連れて行ったところ、次第に泣き声が弱々しくなり様子がおかしくなった。（0歳7ヵ月、重症）

- 自宅で四つんばい（づりばい）をしていて、玄関先屋内階段で約13段転落、顔面等を受傷したもの。（0歳8ヵ月、中等症）

- 階段から落ちるような物音が聞こえたため、親が見に行くと2階で寝ていたはずの子供が1階の階段付近で泣いており、口腔内から出血があった。（0歳7ヵ月、中等症）

〈医療機関ネットワーク〉

■保護者と4歳の兄はキッチンで夕食の準備をしていた。最近夕方になると兄がぐずるので歩行器に乗せている。歩行器に乗せると足は床についたが前には進めず、後ろに動く。まさかそれほど遠くへ移動すると思わなかった。気づいた時には階段13段を歩行器のまま転落していた。保護者がすぐに兄を抱き上げたところ、啼泣し、意識消失などは無かった。転落時は歩行器に座った状態でひっくり返っていた。階段にベビーゲートの設置はしていなかった。急性硬膜外血腫、後頭骨骨折のため8日間入院。(0歳6ヵ月、女児、中等症)

■夜、自宅の2階で保護者が布団を敷いていた。その際、兄が階段の左側の手すりでつかまり立ちをしていたところまで保護者が見ていた。保護者が目を離している間に2階から1階まで13段転落した。ドンという音に気づき保護者がかけつけると、1階のフローリングで四つん這いになっていた。階段は木製、床はフローリング、手すりは縦の手すり、ベビーゲートの設置はなかった。左頭頂部に10cm×5cm程度の皮下血腫を認め、頭部CT検査で同部位に頭蓋骨骨折を認めたため経過観察目的に入院。(0歳10ヵ月、女児、中等症)

(2) 台所の事例

〈医療機関ネットワーク〉

■自宅のキッチンにて保護者は料理をしていて、兄はずり這いでリビングからキッチンに移動してきていた。ベビーゲートの設置はなく自由に出入りできる。電気ケトルは100cmの高さのキッチン台に置かれていてコードが床まで垂れ下がっている状態。兄がコードを引っ張り、ケトルが落下して兄の両側大腿に熱湯がかかった。保護者は夕食の準備で慌てていた。ケトルが落ちる瞬間は見えていた気がする。すぐにシャワーで冷やした。救急車を要請。右大腿Ⅱ度および、左大腿Ⅰ度熱傷、熱傷範囲合計5%。加療のため8日間入院。(6ヵ月、男児、中等症)

■自宅台所にて、棚(高さ70-80cm)の上のオーブントースターの上に電気ケトルを載せて湯沸させていたところ、兄がオーブントースターの扉の開け閉めを何度もしていた。危ないのでケトルを動かそうと保護者が思った矢先、ガタンと大きな音がして兄が尻餅をついて泣いていた。ケトル台座はコンセントに刺さったまま棚にあり、ケトルの上蓋は閉じたまま開いたトースターの扉の上に落ちていた。湯量は500ml位、その8割がこぼれて兄にかかった。兄の身長は78cmで手を伸ばすとトースターの扉に手が届き、最近その開け閉めをするようになっていた。台所入口にはベビーゲートを設置しておらず、兄が自由に入ることが出来る。上腕・前胸部Ⅱ度熱傷のため通院治療。

(1歳3ヵ月、男児、中等症)

3 ヒヤリ・ハットアンケートの分析

都では、これまでに乳幼児に関わるヒヤリ・ハット調査を実施しており、ベビーゲート等に関連する内容について、以下の調査を行っている。

- ・「乳幼児の転落・転倒による危険」(2014年度)
- ・「乳幼児を育てるために使う製品による危険」(2015年度)
- ・「帰省先などの自宅とは異なる住まいでの乳幼児の危険」(2018年度)

(注) 年度は公表年度

(1) ヒヤリ・ハット調査「乳幼児の転落・転倒による危険」

都は、2014(平成26)年度にヒヤリ・ハット調査「乳幼児の転落・転倒による危険」のアンケート結果を報告しており、この中でベビーゲート等に関連している結果を、抜粋した。

- ・調査対象者：東京都在住で乳幼児と同居する保護者
- ・有効回答数 3,000件
- ・アンケート実施期間：2014年1月30日から2月12日まで

本調査では家の居室、家の居室以外、家の外に分けて、製品等毎に乳幼児の転落・転倒の経験等を調査した。また、乳幼児が利用しているもので、普段から危険を感じている商品・場所・サービスを合わせて調査した。

危害：転落・転倒をしてケガをした事例

ヒヤリ・ハット：ケガはしないが転落・転倒した、しそうな事例

ア 製品等別 転落・転倒経験の有無

「図 3-1-2」に、転落・転倒「した」「しそうになった」経験が多い 10 製品等を示す。

イ 転落・転倒により医療機関の受診が多い製品等

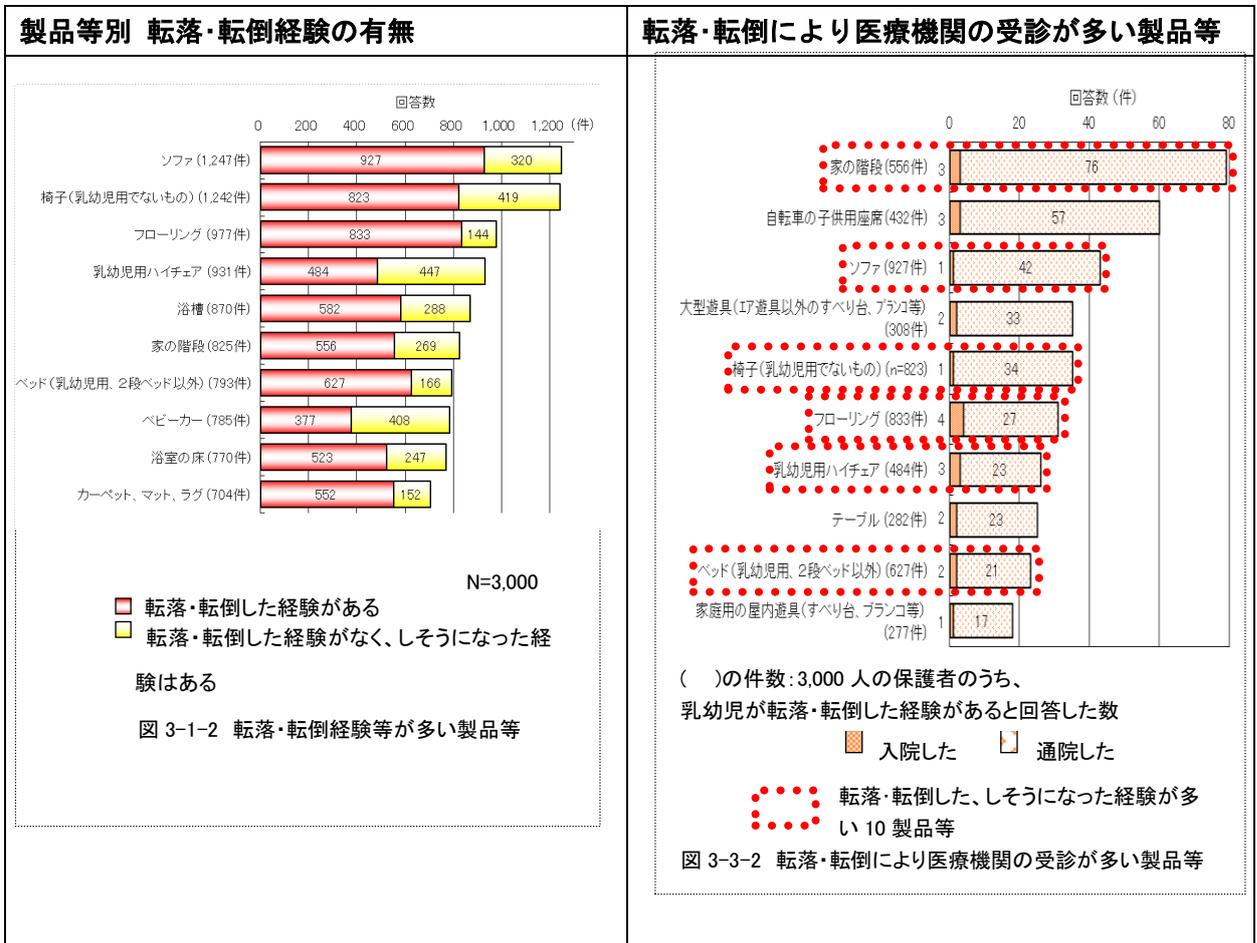
「図 3-3-2」に、転落・転倒によって医療機関の受診^{※1}が多い 10 製品等を示す。
家の階段で転落・転倒をした、しそうになった経験数は 6 位(P.5 参照)と高く、加えて受診率は 14%^{※2}と高い。

※1 医療機関の受診：「入院した」及び「通院した」

※2 家の階段での転落・転倒による受診率：

入院した 3 件 + 通院した 76 件

家の階段で転落・転倒した経験があると回答した数 556 件



ウ 階段での転落・転倒の事例

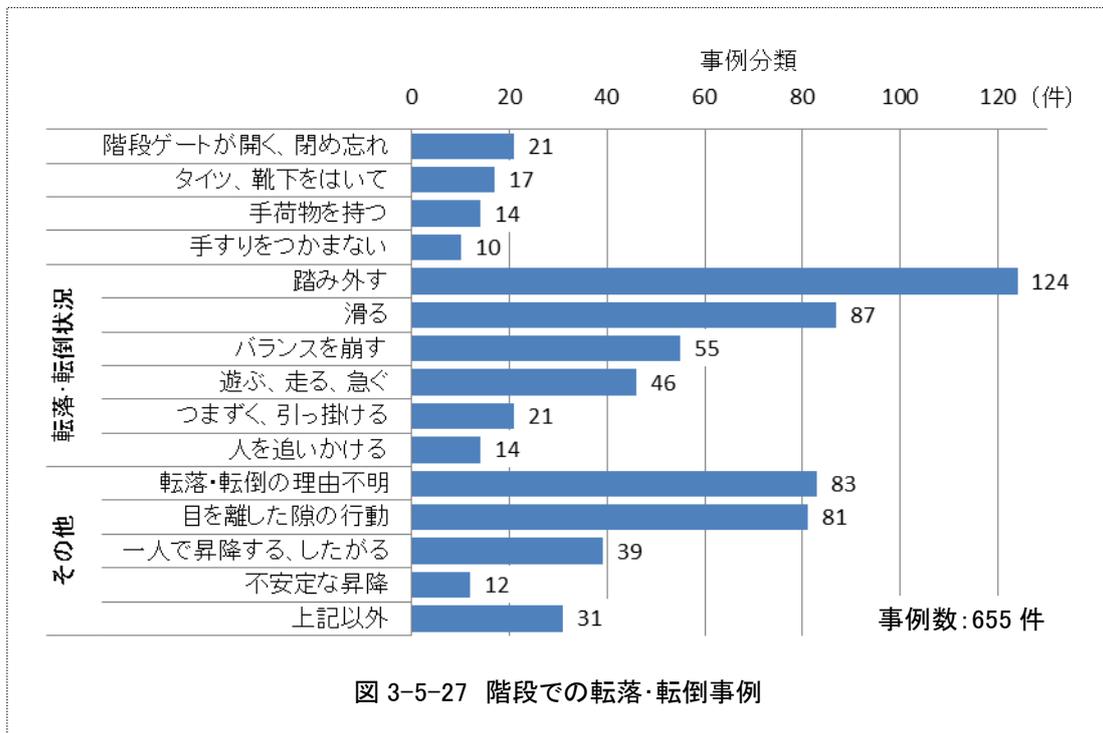


図 3-5-27 階段での転落・転倒事例

転落防止製品に関しては「階段ゲートが開く、閉め忘れ」が 21 件である。
 服装に関しては「タイツ、靴下をはいて」が 17 件である。
 転落・転倒状況では「踏み外す」が 124 件で最も多く、「滑る」は 87 件である。
 その他の内訳として、「目を離した際の行動」は 81 件である。

主な事例等		保護者が考える原因
階段の柵が開いていた	<p>階段の柵をしてなかったので、母親を追いかけて階段を登って、階段 5 段くらいから落ちて意識が混濁。すぐに救急車を呼び病院へ行った。硬膜内血腫で緊急手術をしたが、奇跡的にも後遺症等も残ることはなかった。</p> <p>《その後の防止対策》</p> <p>必ず柵をするようにした。</p>	☆不注意

(2) ヒヤリ・ハット調査「乳幼児を育てるために使う製品による危険」

都は、2015（平成 27）年度にヒヤリ・ハット調査「乳幼児を育てるために使う製品による危険」アンケート結果を報告しており、この中でベビーゲート等に関連している結果を抜粋した。

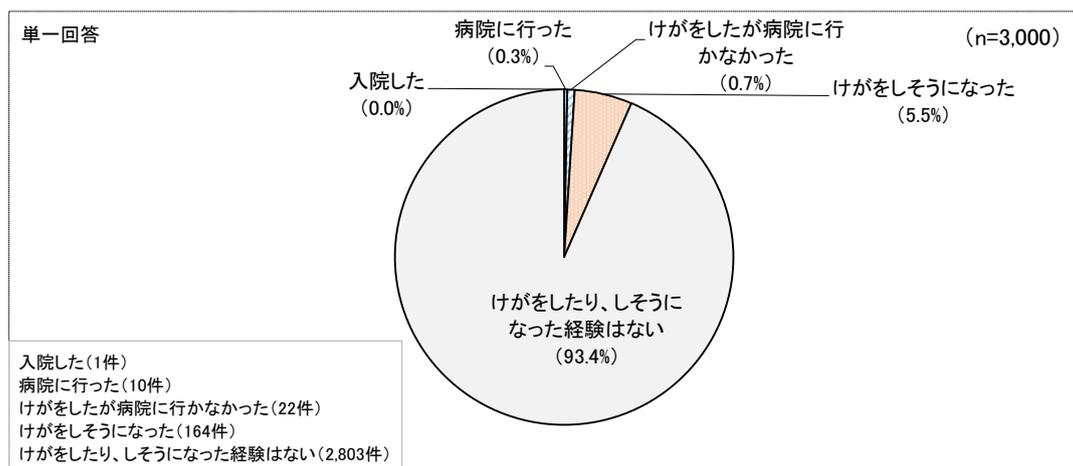
- ・調査対象者：都内、神奈川県、千葉県、埼玉県に居住する 6 か月から 6 歳（未就学児）の子供を持つ 20 歳以上の男女
- ・有効回答数：3,000 件
- ・アンケート実施期間：2015 年 1 月 20 日から 2 月 10 日まで

本調査では乳幼児を育てるために使用する製品などに関する危険の実態を調査する目的で行った。その中で、「乳幼児向け安全グッズ」に関する危害およびヒヤリ・ハット経験について調査を行った。

- 「危害」：通院、入院の有無にかかわらず、けがをした
- 「ヒヤリ・ハット」：けがをしそうになった

ア 乳幼児向け安全グッズにおける危害およびヒヤリ・ハット経験について

子供の乳幼児向け安全グッズによる危害およびヒヤリ・ハット経験 197 件についての程度の内訳は、「けがをしそうになった」5.5%、「けがをしたが病院に行かなかった」0.7%、「病院に行った」0.3%、「入院した」0.0%（1 人）となっている。



イ 危害・ヒヤリ・ハットを経験した乳幼児向け安全グッズ

けがをした乳幼児向け安全グッズの製品をみると、「ゲート」が13件と最も多く、次いで「ベッドガード」が9件、「コンセントキャップ」が3件と続いている。

けがをしそうになった乳幼児向け安全グッズの製品をみると、「ゲート」が53件で最も多く、次いで、「ベッドガード」が43件、「コンセントキャップ」30件、「ストーブフェンス」15件、「ベビーサークル」10件と続いている。

危害にあった乳幼児向け安全グッズ				ヒヤリ・ハットを経験した乳幼児向け安全グッズ						
※3件以上の製品について掲載 (件数)				※3件以上の製品について掲載 (件数)						
				ゲート	ベッドガード	コンセントキャップ				
件数合計				13	9	3				
男の子	0歳				1					
	1歳			2	4					1
	2歳			1						
	3歳			1	1					
	4歳			1						
	5歳									
	6歳									
女の子	0歳			1	2					
	1歳			4						
	2歳			3	1					
	3歳									
	4歳									
	5歳									
	6歳									
				ゲート	ベッドガード	コンセントキャップ	ストーブフェンス	ベビーサークル		
件数合計				53	43	30	15	10		
男の子	0歳			2	5	6	2	2		
	1歳			6	8	8	4	1		
	2歳			13	1	2	2	3		
	3歳			4	3		2			
	4歳			2			1			
	5歳									
	6歳				1					
女の子	0歳			1	8	5	2	1		
	1歳			11	7	5		1		
	2歳			7	9	4	2	1		
	3歳			5	1					
	4歳			1				1		
	5歳			1						
	6歳									

ウ 危害およびヒヤリ・ハットの主な事例

状況	詳細
開錠	階段ゲートを取り付けていたが、上の子が、親の見ていない間にロックを外していたようで、下の子が誤ってそれを開けて、転げ落ちてしまった。(1歳 女児)
外れる	2階の階段の上にベビーゲートをつけていたけれど何度も何度も体当たりされて外れて一緒に階段から落ちそうになった。両端を止めていた片方だけがとれたのでそこにひっかかって落ちなかった。(2歳 男児)
指はさみ	リビングからキッチンに入らないように子供用ゲートを設置していた。2歳になり開け方を見て覚えたらしく、親がトイレに行った時に、自分で開けようとしたが、上手く開けることが出来ず指が挟まってしまった。(2歳 男児)

(3) ヒヤリ・ハット調査「帰省先などの自宅とは異なる住まいでの乳幼児の危険」

都は、2018（平成 30）年度にヒヤリ・ハット調査「帰省先などの自宅とは異なる住まいでの乳幼児の危険」アンケート結果を報告しており、この中でベビーゲート等を設置することで防ぐことができる可能性のある事例を抜粋した。

- ・調査対象者：都内、神奈川県、千葉県、埼玉県に居住する 0 歳から 6 歳（未就学児）の子供を持つ 20 歳以上の保護者で、帰省先などの自宅とは異なる住まいがあること
- ・有効回答数：3,000 件
- ・アンケート実施期間：2019 年 1 月 25 日～1 月 31 日まで

本調査では乳幼児における「帰省先などの自宅とは異なる住まい」に関する製品等での乳幼児の危害およびヒヤリ・ハット事例などの収集することを目的に実施した。

- 「危害」：通院、入院の有無にかかわらず、けがをした
- 「ヒヤリ・ハット」：けがをしそうになった
- 「帰省先などの自宅とは異なる住まい」：就学前の乳幼児が居住していない住まいであり、過去 5 年以内に 1 年でも、当該乳幼児が年間 1 回から 5 回までの頻度で訪問した住まい

ア 帰省先などの自宅とは異なる住まいでの危害及びヒヤリ・ハット経験

図 2_1 は帰省先などの自宅とは異なる住まいでの危害及びヒヤリ・ハット経験について、7 つの場所全体での経験割合を示している。何らかの危害及びヒヤリ・ハット経験がある（「危害経験がある」＋「ヒヤリ・ハット経験がある」と回答した人は 1,686 人（56.2%）で、5 割を超えている。そのうち、危害経験があると回答した人は 641 人（21.4%）となっている。

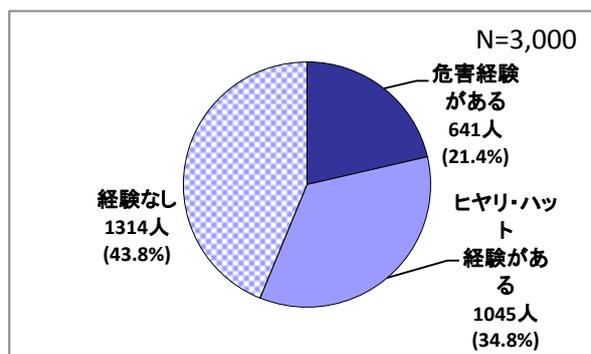


図 2_1. 危害及びヒヤリ・ハット経験（全体）

※ 回答者が複数の危害及びヒヤリ・ハットを経験している場合、より危害程度の高い方を計算対象とする。

図 2_2 は本調査で収集した危害及びヒヤリ・ハット経験を、起きた場所別に分類し、それぞれの経験者数を示している。

「リビング・居間」は危害及びヒヤリ・ハット経験者が 3,000 人中 1,096 人 (36.5%) と最も多く、次いで「玄関・階段・廊下」が 811 人 (27.0%)、「台所・ダイニング」が 700 人 (23.3%)、「お風呂・脱衣所・洗面所・トイレ」が 460 人 (15.3%) と続く。

「危害経験がある」の回答が最も多かったのは「リビング・居間」で、330 人 (11.0%) であった。

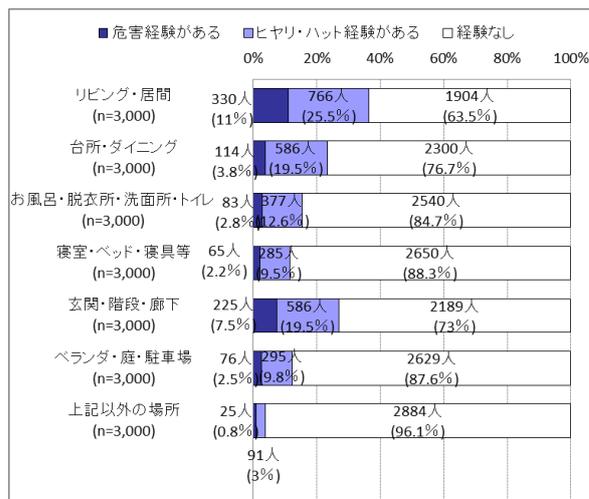


図 2.2. 危害及びヒヤリ・ハット経験 (場所別)

イ 玄関・階段・廊下での危害及びヒヤリ・ハット経験 (概要)

図 7_1 は玄関・階段・廊下での危害及びヒヤリ・ハット経験の程度について、原因となった製品別に経験者数をまとめた結果である (上位 11 位以降の製品は「その他」にまとめた)。

危害及びヒヤリ・ハット経験があると回答した人数は、3,000 人中 811 人 (27.0%) であった。

製品別に見ると、「階段」が 370 人 (45.6%) と最も多く、次いで、「玄関」が 195 人 (24.0%)、「ドア・窓類」が 169 人 (20.8%) となっている。

“危害経験がある”との回答は、「階段」が 83 人と最も多くなり、次いで「ドア・窓類」が 71 人となっている。

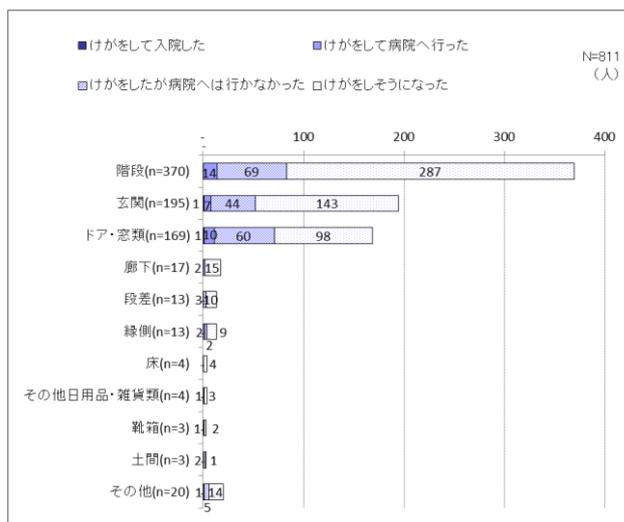


図 7_1. 玄関・階段・廊下での危害及びヒヤリ・ハット経験の程度 (製品別)

表 7_1_1 は玄関・階段・廊下での危害及びヒヤリ・ハット経験について、事例及び原因となった製品別に経験者数をまとめた結果である。

経験者数 811 人のうち、「転落」の事例が 422 人 (52.0%) と最も多く、次いで「はさんだ」が 156 人 (19.2%)、「転倒」が 134 人 (16.5%) と続く。

事例別に見ると、「転落」に関わる製品では、「階段」が 275 人と最も多く、「はさんだ」では、「ドア・窓類」が 151 人で最も多くなっている。「転倒」では、「玄関」が 64 人、「階段」が 46 人となっている。

表 7_1_2 は子供の性・年齢別に危害及びヒヤリ・ハット経験をした製品を比較した結果である。全体として、男児の事例が 445 人で、女児の 366 人と比べ多くなっている。

表 7_1_1. 玄関・階段・廊下での危害及びヒヤリ・ハット経験 (事例×製品別)

	(人)									
	全 体	転 落	は さん だ	転 倒	思 わ ぬ 所 に 移 動 ・ 飛 び 出 し	ぶ つ け た ・ 遊 ん だ	危 険 な も の に 触 つ た ・ 誤 飲	物 が 落 ち て き た ・ 倒 れ て き た	切 っ た ・ 擦 り む い た	そ の 他
全 体	811	422	156	134	46	20	6	4	3	17
階段	370	275	1	46	39	2	1	-	1	5
玄関	195	117	-	64	7	2	-	-	1	4
ドア・窓類	169	3	151	1	-	10	-	-	1	3
廊下	17	3	-	10	-	2	-	-	1	-
段差	13	8	-	5	-	-	-	-	-	-
縁側	13	10	-	2	-	-	-	-	1	-
床	4	-	-	4	-	-	-	-	-	-
その他日用品・雑貨類	4	-	-	1	-	1	-	2	-	-
靴箱	3	-	2	-	-	1	-	-	-	-
土間	3	3	-	-	-	-	-	-	-	-
その他	20	3	2	1	-	2	5	2	-	5

表 7_1_2. 玄関・階段・廊下での危害及びヒヤリ・ハット経験 (製品×子供の性・年齢別)

	(人)													
	全 体	階 段	玄 関	ド ア ・ 窓 類	廊 下	段 差	縁 側	床	用 品 ・ 雑 日	そ の 他	靴 箱	土 間	そ の 他	
全 体	811	370	195	169	17	13	13	4	4	3	3	20		
子供の性別・年齢	男児合計	445	199	106	95	11	6	7	2	3	2	1	13	
	男児0歳	25	6	15	1	2	1	-	-	-	-	-	-	
	男児1歳	130	59	42	24	2	1	-	-	1	-	1	-	
	男児2歳	136	62	26	33	4	1	3	-	-	-	-	7	
	男児3歳	95	47	16	21	1	2	4	1	1	1	-	1	
	男児4歳	39	15	6	12	1	1	-	1	-	-	-	3	
	男児5歳	13	8	1	2	1	-	-	-	-	1	-	-	
	男児6歳	7	2	-	2	-	-	-	-	1	-	-	2	
	女児合計	366	171	89	74	6	7	6	2	1	1	2	7	
	女児0歳	22	10	7	4	-	1	-	-	-	-	-	-	
	女児1歳	117	56	38	15	-	3	2	1	1	-	-	1	
	女児2歳	106	48	20	28	2	3	2	-	-	-	1	2	
	女児3歳	71	34	13	18	2	-	1	-	-	1	-	2	
	女児4歳	23	11	5	5	2	-	-	-	-	-	-	-	
女児5歳	20	7	4	4	-	-	1	1	-	-	1	2		
女児6歳	7	5	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-		

(4) 「階段」での危害及びヒヤリ・ハット経験

図 7_2 は、「階段」での危害及びヒヤリ・ハット経験の程度について、事例別に経験者数をまとめた結果である。

「階段」での危害及びヒヤリ・ハット経験は、玄関・階段・廊下における経験者 811 人のうち、370 人であった。事例別に見ると、「転落」が 275 人と最も多く、次いで「転倒」が 46 人、「思わぬ所に移動・飛出し」が 39 人と続く。

“危害経験がある”との回答は、「転落」で 68 人、「転倒」で 13 人となっている。

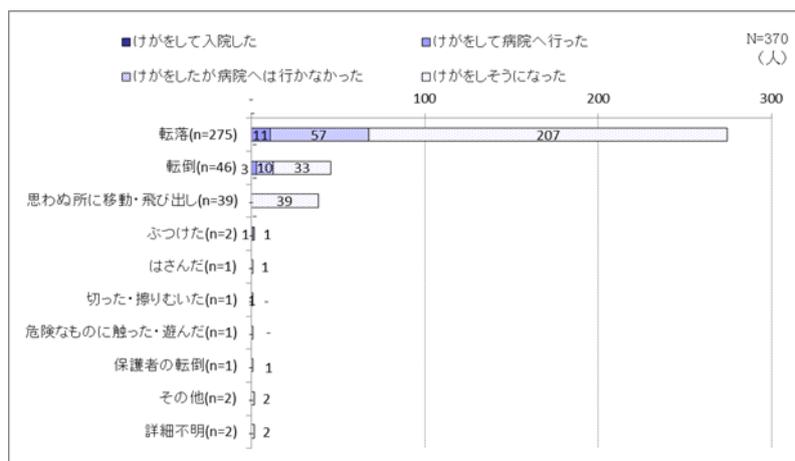


図 7_2. 「階段」での危害及びヒヤリ・ハット経験の程度 (事例別)

(5) 詳細事例

階段の転落の事例を以下に示す。

No.	製品	事例	性別・年齢	内容
1	階段	転落	女兒 0 歳	自宅では柵と手すりです転落防止をしているが、祖父母宅にはないので、階段から転落しそうになった。
2	階段	転落	女兒 1 歳	夜、子供が二階で寝ていたが、夜中に起きて階段から落ちた。
3	階段	転落	男児 2 歳	自宅はマンションで階段がないが、実家は一軒家で階段がある。子供が階段が好きでのぼりたがり、目を離したときに一人でのぼって数段上から落ちてしまった。
4	階段	転落	男児 3 歳	靴下を履いたまま階段を降りていったところ、滑って転落した。けがはなかった。
5	階段	転落	女兒 4 歳	傾斜が急で転げ落ちた。
6	階段	転落	女兒 6 歳	トイレの横に階段があり、夜中トイレに行くとき落ちそうになった

※ 内容については、明確な誤字及び特定の製品名を示すもの以外はアンケート回答のまま掲載した。